

平和文化研究 第39集 (2019年1月)

長崎のイエズス会本部とその影響

～そこで活動したイエズス会員を中心に～

日本イエズス会管区長

デ・ルカ・レンゾ

長崎のイエズス会本部とその影響

～そこで活動したイエズス会員を中心に～

日本イエズス会管区長
デ・ルカ・レンゾ

長崎の旧県庁敷地（江戸町2-13）に、400年前にイエズス会の本部が置かれていた。修道会の本部のみならず、海外との交流の場でもあった。出島が出来るまではイエズス会の本部を通して様々な人・物・文化・宗教の出会いの場として活躍した。本来、修道者中心の建物だったが、恵まれた位置と人材によって早い段階でも幅広い活動が行われていた。当時のイエズス会が批判されるほどである。その状態を弁明して1598年の『弁駁論』に巡察師ヴァリニャーノが以下の箇所を記した。

[83] 商売、またそのすべての出来事について起こるポルトガル人との問題のため、日本人はいつも神父達を探すので、同じ家〔イエズス会本部〕に出入りする両方の人数が多いことは事実である。しかし、彼らは長崎に（相談できる）人がいなくて神父達に対するこの信頼と評判があるが故に忠告を得ようとして来るとすれば、私たちに別の行動ができようか¹。

言うまでもなく、ヴァリニャーノはイエズス会の立場で判断するが、この描写からイエズス会本部が長崎全体に影響を与えていたと言えよう。秀吉の追放令 11 年後にもその役割は発展していた。徳川幕府が確立されても 1603 年のセルケイラ司教が本部の発展に制限をかける必要を感じたほどである。

我等のコレジオでたびたび商人たちのパンカードについて話し合いが行われている。〔略〕コレジオでは〔ポルトガルの〕商人たちと日本人たちの絹の配分についての証明が記されていた²。

これを参考にすれば、本部が宗教・文化を越えて商業活動にまで広がり、修道院にそぐわない状態にまでなっていたことが分かる。セルケイラ司教はその事実を心配の目で描いているが、その影響が大きかったからに相違ない。これについて、高瀬弘一郎先生が詳しく書き残したのでその研究を参照してもらいたい³。これについて書いた異なった立場と時代の人であっても、イエズス会本部の影響力を認めている。

海から見える「大教会」

天正遣欧使節は、教皇謁見を遂げた1585年、イエズス会本部の教会が「長崎の顔」になっていたように描く。当時の記録に当たるリンショテンの本に以下の描写が残されている。

¹ Alejandro Valignano, *Apología de la Compañía de Jesús de Japón y China* [1598], ed. José Luis Álvarez-Taladriz, Osaka, [非売品], 1998, p. 197より拙訳。筆者は別な記事でこの史料を紹介したことがあるが、便宜上ここで掲載する。

² 長崎より1603年3月23日付セルケイラ司教書簡。イエズス会ローマ文書館Jap. Sin. 20, 167より拙訳。

³ 特に長崎のイエズス会の影響力について、高瀬弘一郎『キリシタン時代対外関係の研究』吉川弘文館 1994年10月など膨大な研究がある。ここで、簡潔に述べている、高瀬弘一郎「岩波講座日本歴史」近世 I, Tokyo 1975、また、高瀬弘一郎「キリシタン教会の財務担当パードレについて」社会経済史学 第41巻第2号, 1975を推薦したい。

自分の位置からそれと反対側にある木が中心的な教会の頂点に並んで見える時、正しい位置で停泊するための良い場所である⁴。

カトリック教会と縁が強くないオランダやイギリスでも、このような記録が出版され、限られた人間にしる、ヨーロッパで知られたことが確認できる。評判のみならず、その現実を知った者の記録として、「日本のイエズス会の家・人・経理についての短い報告」も参考になろう。関連する箇所の一部を紹介しておこう。

日本の皇帝〔家康〕が支配している長崎市について。〔イエズス会は〕5万人のキリシタンがいる長崎に、市内にコレジオと修練院、市外に修道院を持っている。

年によって〔相違があるが〕コレジオに神父15人、イルマン12人、学生60人、手伝う少年120人がある。客が多く、作画室、ラテン語と日本語で本を作る印刷室、準管区長〔パシオ〕と会計事務局長及びその補佐達、また全国から治療を受けに来る会員達を含めた出費は3200クルザド。このコレジオには綺麗な教会、大きな建物と修道院があり、最近年に7000クルザドを費やした。長崎は(日本の)全キリシタンの頭であり、そこに住んでいる人々が皆キリシタンであるが故に全国から貧しい人々と信仰のために迫害を受ける人々が来て、イエズス会がその人々のため800クルザドを費やす。その〔金額〕は、神父達がポルトガル人と日本人から寄付金を募って配っている大金を別にしてのものである。...

この町に司教が住んでいる。既に教区に属する4人の神父と神父になるために倫理学を勉強している多くの神学生がいる。イエズス会には邦人司祭が5人いる⁵。

今まで紹介した史料からでも明らかなように、当時、イエズス会本部には計りがたい影響力があった。次に本部で活躍したイエズス会員を紹介したい。

本部と直接関わったイエズス会員

長崎の旧県庁敷地にイエズス会本部のあった時期は、迫害などによって様々な変化を見たイエズス会本部が、一番安定していた場所だったと言えよう。時代によって様々な変化があったものの、オフィスでありながら住居でもあり、礼拝の場、墓地の場所でもあった。基本的に管区本部と関わる会員しか住んでいなかったが、旅行者、安静期間を過ごす会員、治療を受ける会員などで賑わう場所でもあった。

ここで、この本部に葬られたイエズス会員を紹介したいと思う。先ず、史料で確認できる人と基本的な情報を一覧表に示す。整理番号は没年順にした。

#	名前	国籍	生年	出身地	日本入国	入会年	没年	備考
1	P. Miguel Vaz	Por.	c.1540	コチン	1546	(Jap) 1564	1582	司祭叙階1580
2	P.João Pedro Crasso (Grasso)	It.	1551	ミラノ	1586.08	1570	1588.05	
3	Ir. Lourenço 了齋	Jap.	1564	白石(平戸)		1561	1592.2.3	ザビエルより受洗 琵琶法師
4	P. Sebastião Gonçalves	Por.	1533		1572		1597.04.09	司祭叙階
5	P. Luis Frois	Por.	1532	リスボン	1563.07.06	1548	1597.07.08.	横瀬浦着
6	P. Antonio Lopes	Por.	1548	リスボン	1576.06	1565?	1598	
7	P. Pedro Gomez	Es.	1535	アンテケラ	1583	1553	1600.02.21	1559司祭叙階

⁴ Linschoten, "Discours of Voyages" London, 1598, p. 397より拙訳。最近この史料がインターネット上で閲覧可能になった。

⁵ 「日本のイエズス会の家・人・経理についての短い報告」(1609年11月12日、ローマイエズス会文書館 Jap. Sin. 20, 154vより拙訳)。この史料も紹介したことがある。

8	P. Alonso Gonzalez	Es.	1546?	ガリシア?	1576.06	1567-8	1601.02.23	
9	Ir. Francisco de Oliveira	Por.		マカオ	1603 (1602?)	1602	1604	長崎?
10	P. Baltasar Lopes	Por.	1535	ヴィラヴィコサ	1570.06.18	1561	1605.12.03	「大ロペス」と呼ばれた。
11	P. Zacarias Campioni	It.	1572	プラレンカ	1607		1607	
12	P. Gnechi-Soldo Organtino	It.	1533	アストロ	1570.06.18	1556	1609.04.22.	志岐着
13	P. Gonçalo Rebello	Por.	1543	ラメゴ	1577	1565	1608-1609. 03.14	
14	P. Pedro Ramón	Es.	1549	バスティダ	1577	1570	1611.08	1572にローマ滞在
15	P. Jovanni Francesco Stephanoni	It.	1540?	ローマ	1574	1560	1612.02.26?	1566司祭叙階
16	P. 伊東 Mancio	Jap.	1570?	日向都於郡		1591	1612.11.13	使節正使1601 Macao, 1604 帰国
17	P. 平林 Mancio	Jap.	1571?	豊後		1595.10	1615.3.21	帰国後病死
18	Ir. (秋月)Damian de la Cruz	Jap.	1540	秋月		1567?	1587.12.29	下関で死去。遺体は1592 長崎に

表の見方：「P.」は神父を指す。「Ir.」は修道士を指す。「?」は不確かだが可能性の高い情報を指す。空欄は不詳。史料には名前がローマ字しか載っていないので、日本人の場合、推定の漢字となる。国籍は当時の習慣に従った。例えば、マカオ生まれの会員をポルトガル人として掲載している。この表は正式に入会し、本部敷地内にあった墓地に眠ったイエズス会員に限る。つまり、同宿や看坊を含まない。史料に掲載されなかった会員も葬られた可能性がある。長崎で死去してもその遺骨がマカオに移されたセルケイラ司教のような名前、また殉教して葬られなかった多くの会員の名前も掲載していない。

会員によって情報量が異なるが、史料を基にした百科事典などを基にした簡単な紹介をしたい。説明の後に詳細な情報源を載せる。現存する史料だけでも驚くほどの量になることに注目して頂きたい⁶。上掲の一覧表以上の情報がない会員を省略する。

1、ミゲル・ヴァズ Miguel Vaz

インド生まれのポルトガル人。1562年にマラッカでイエズス会員のモンテとフロイスと出会った。入会する前にその二人と共に横瀬浦着で来日。一旦マカオに戻るが、日本に戻って1564年に口之津で入会した。商人として得た知識を活かして会計係になり、責任者達と共に移動する。1579年にマカオに渡り、神父になって1580年に日本に戻る。1582年に長崎で死去。フロイスによれば⁷会計の仕事と共に

⁶ ここでは手書きの「第一資料」に限定した。「Jap. Sin.」は、ローマイエズス会文書館内のJaponica Sinica、日本と中国に関する史料がまとまっている部分を指す。「BM」は、ロンドンにあるBritish Museum内の部分を指す。「BRA」は、マドリードにあるBiblioteca de la Real Academia内の史料を指す。「Ajuda」は、ポルトガルのアジュダ文書館内の史料を指す。最初の番号が巻を(太字)示すが、場合によって同じ巻番号で「I」「II」「III」に分かれている。それに続く「-」で繋がれる番号がページを表す。なお、当時の紙面は裏表に書かれていたが、ページ番号を一枚としてしか数えていなかった。必要に応じてその一枚の裏を「v」を入れて区別する。つまり、番号の二倍の書かれた量になる。詳細は、尾原悟編『キリシタン文庫』南窓社 1981と、松田毅一『近世初期日本関係 南蛮史料の研究』風間書房、1967年を参考して頂きたい。

⁷ フロイス、『日本史』10 中央公論社 p. 217

熱心な宣教活動を行い、人々から愛されていた。手紙何通かを残した⁸。滞在、口之津 (1566-1567)、志岐 (1568-71)、長崎 (1575-77) 口之津 (1579)。

2、ピエトロ・クラッソ Juan Pietro Crasso

彼については情報が乏しいが、「イタリアのミラノ出身、37歳、入会してから17年間。勉強を終えてから1586年に日本に送られ、日本語を覚えてから大いに期待されたがわずか二年後の1588年に長崎で亡くなった。」(Jap.Sin. 25 f 54vより拙訳)とあるので、本部と関わる会員だったことが確認できる。

3、ロレンソ了齋 Lourenço Ryosai

1526年肥前白石(平戸市)にて生まれる。目が不自由で、琵琶法師となる。1551年山口でザビエルに出会い、ロレンソ名で受洗。以後、宣教師たちの活動に従事する。1559年ヴィレラと共に京に入り、將軍足利義輝に謁見し、宣教許可を受ける。松永久秀の招きで奈良に行き、仏僧と宗論した。1560年京都より、インド管区長に手紙を出す。1561年堺に移り、日比屋了圭の家を中心に宣教する。1563年正式にイエズス会に入会、修道士となる。1564年高山右近ら、105人受洗。1565年九州に移り、口之津を中心に五島まで宣教活動を行う。1569年畿内へ戻り、織田信長から宣教許可を受け、フロイスと共に信長の前で日蓮宗の僧朝山日乗と議論を行う。1580年安土城にて信長に謁見しキリスト教について説明する。1585年セスペデス神父と共に大阪にいた秀吉を訪問する。1587年豊臣秀吉によるバテレン追放令を受けて平戸に移り、活動を続ける。1590年ヴァリニャーノに招かれて加津佐の管区会議に参加する。以後長崎に住む。1592年長崎で死去した。詳細な研究と史料は、結城了悟『ロレンソ了齋—平戸の琵琶法師』、長崎文献社、2005年4月に出ている。

5、ルイス・フロイス Luis Frois

リスボン生まれ、1548年入会。来日前のザビエルや日本人アンジローらに会った。61年ゴアで司祭になり、63年7月に来日。12月度島(平戸)に渡り、日本語などを学んだ。64年末に京都に派遣され、12年余り滞在。69年3月に織田信長謁見。72年に通訳として布教長カブラルに同行し信長を訪問。77-81年まで豊後地方の責任者。1580年、ヴァリニャーノと共に上京し信長から歓待された。83年秋より『日本史』の編纂に取りかかる。87年クエリョ神父に同行し豊臣秀吉に謁見。90年長崎に移り、92年2月と7月の準管区総会議では書記を務めた。同年10月マカオへ行き、3年余り秘書を務め、95年長崎へ戻った。97年二十六聖人の殉教記録を書き、同年7月長崎で没した。(フロイスについては余りにも多くの研究があるので、ここでは省略する。)膨大な史料を残して⁹現代でもその出版や翻訳がなされている。

⁸ 現存する本人による史料、(尾原悟編『キリシタン文庫』南窓社 1981 p. 371より。第一資料を網羅したこの研究を、尾原『キリシタン文庫』と略す。)Jap. Sin. 6, 128-129v, 130-132v, 212-214v, 215-219v, 248-251v, 289-292v, 293-296v; 7 I, 70-71v, 7 II, 281-283v 7 III, 277-280v, 8 I, 121v-122; マドリード BRA, Cortes 562, 46-50, 50v-51bis, 129-134, 175

⁹ 史料(尾原『キリシタン文庫』p. 391より) Jap. Sin. 5, 30-35v, 112-113v, 116-122v, 123-130v, 135-135v 136-139v, 140-143v, 144-147v, 148-151v, 184-194v, 195-206v, 214-220v, 221-224v, 225-230v, 231-236v, 237-240v, 241-247v, 248-252v, 253-258v, 259-264v, 265-266v, 267-268v, 269-270v, 277-280v, 281-284v, 285-288v, 6, 113-114v, 115-115v, 116-119v, 120-123v, 183-188v, 220-222v, 223-225v, 226-227v, 307-311, 311-312v, 318-321v, 7 I, 63-65v, 91-92v, 130-136v, 137-137av, 231-234v, 255-258v, 7 II, 11-15, 15-16v, 113-120v, 138-143, 143v-145v; 235-238, 238-240v, 7 III, 39-52v, 53-58v, 59-62v, 66-67v 93-94v, 121-126v, 127-129v, 146-149, 149-150v, 8 I, 113-119v, 176-176v, 225-226v, 8 II 101-103, 124-127v, 154-159v, 8 III, 83-100v, 142-148v, 148v-153; 251-252, 252v-253? 253-254, 9 I 5-6v, 7-8v 3 9-12, 12-14, 39-40v, 83-84v, 94-95v, 96-105v, 151-162v, 9 II, 236-241v, 242-247v, 248-256v, 270-279v, 280-290v, 309-314av, 328-331v, 332-335v, 10 I 1-4v 5-10v, 51-55v, 10 II 163-172vs 173-176, 222-225v, 11 I,

5、ペトロ・ゴメス **Pedro GÓMEZ**

1550年パステイダ、サラゴサ、スペインに生まれる。1570年アルカラでイエズス会に入会。1572年ローマへ行く。1573年コインブラ、ポルトガルにて司祭となる。1574年インドへ出発。ゴアで修練長になる。1576年マカオへ行く。1577年長崎到着。1580年臼杵で修練長になる。1581年長崎の会議に与かる。1582年少年使節出発。1586年臼杵から山口へ。1587年生月に行く。ローマに手紙を送る。1592年八良尾のセミナリオの院長になる。1595年マカオに行く。1600年日本に帰る。宇土城で加藤清正によって捕えられる。1601年博多の教会に行く。1610年長崎に向かう。1611年長崎にて死亡¹⁰。

10、バルタサル・ロペス **Baltasar Lopes**

情報がほとんどない中、日本イエズス会第一回協議会(1580~81年)¹¹と日本イエズス会第二回総協議会(1590年)に参加したことから考えれば、判断力と知識を持った人物だったであろう¹²。

11、ザカリアス・カムピオニ **Zacarias Campioni**

イタリアのプラレンカ出身。1590年に入会。マカオで神学教授になったが、「そこで病気になり、治療と当地の人々への奉仕を考慮して、体質に合う土地として日本に派遣されたが、突然に亡くなった。」1606年に最終誓願をたて、同年に亡くなった。商船が着いてから17日後に亡くなった。（1607年報、アジュダ文書館, 49-IV-59, f. 390v-391より拙訳。）

60-64v, 138-139v, **11 II**, 301-302v, **12 I**, 96-97v 5 112-113V, 148-149v, **12 II**, 347-348v, 355-356v, 22, 1-23v, 244r-249v, **45 I**, 56-76av, 130-133V, **45 II**, 1-14v, 84-95v 96-100v, 101-120v, 128-129v, 46, 274-297v, 298-317v, **50**, 19-42v, 43-52v, 53-58v, 59-80v, 81-96v, 97-130v, **51** 18-43v; 44-62v, 63-82v, 83-102v, 103-139v, 276-298v, 299-302v, 303- 370v, **52**, 85-117v, 124-171v 179-230v, 231-250v, **53**, 171v, 54, 16-30v, 32-48v, **Ajuda Jesuitas na Asia 49_IV_49** 147-153v 234v-253v, 276v-279s **49-IV-50**, 91v-94v, 98-108, 113-120v, 120v-131v 205-213, 213v-234, 234-242V, 283v-285, 295-296, 302-302v, 312-313, 333v-335, 337v-338, 350-354, 354v-357v, 363v-366v, 400, 506-511v, 536-541, 613v-614, 614v-615, 49-IV-54, 14-23, **49-IV-57**, 1-294, **BRA Jes.** 21, 247-286v, **Cortes 5** 62s 60-60v, 61-61v, 65-66, 66v-74, 74-03v, 110-123v, 124-127, 135-141v, 164-174v, 186- 200v, 253-254, 254v-258, 371-378v, 429-438, 453-484v, 490-514, 566, 285-286v3 299-308v, **BM Add. Mss. 9859**, 1-8v 5 9-18v

¹⁰ 史料、（尾原『キリシタン文庫』p. 379より）**Jap. Sin. 9 I**, 51-53V, 85-86v, 108-109V, 130-132v, **9 II**, 177-178v 179-181v, 298-299v, 300-301v, **10 I**, 11-12v, 19-20v, 58-59v 64-65v, **10 II**, 161-162v, 176-177v, 264-265v, 266-267v, 310-311v, **11 I**, 60-64v, 129-130v, 134-135v, **11 II**, 257-258v, 298-299v, 303-304v, 305-306v, **12 I**, 104-105v 168-169v, 170-171v, 182-183v, **12 II** 243-243v, 259-260v, 268-269v, 270-271v, **13 I**, 7-8v, 123-124v, 128-129v, 143-144v, 154-155v, **13 II**, 196-198v, 210-211v, **45 II** 128-129v, **52**, 1-40, 251-266v, 270-304, 304-311v, **53**, 112-141v, 142-149v, 156-179v, **マドリード Cortes 562**, 448-450, 565, 1-18v, 341, 566, 273-276v, 283-284V, 285-286v, 567, N. 6 62, **ロンドン BM, Add. Mss. 9858**, 10v-14, **9860**, 61-62

¹¹ 詳細は、井手勝美訳「日本イエズス会第一回協議会(一五八〇-八一年)と東インド巡察師ヴァリニャーノの裁決(八二年)」『キリシタン研究』第二二輯（1983年）328ページ。

¹² 史料、（尾原『キリシタン文庫』p. 400より）**Jap. Sin. 9 I**, 106-107v, **9 II**, 234-235v, 317-317v, **10 II**, 228-229v, **12 II**, 272-273v, **13 II**, 321-322v, **45 II**, 8, 51, 107v-108, 113v-114v, **BRA, Cortes 562** 458-458v, 463v-464v.

12、オルガン ティーノ・ネッチ **Gnecchi Soldo Organtino**

イタリア出身。1556年に司祭になり、後に入会。17年ゴアに至る。70年6月カブラル神父と共に志岐に到着、フロイスと共に畿内に派遣される。都地方の責任者を務め、被昇天の聖母教会(南蛮寺)を建て、76年8月15日最初のミサをささげた。織田信長保護を受け、80年安土にセミナリヨと修道院を建てた。83年豊臣秀吉から大坂城下に教会建設の許可を受ける。87年の伴天連追放令施行後は小西行長の領内に隠れ、91年ヴァリニャーノとともに秀吉に謁見後、再び都地方で宣教した。1609年、長崎で死没。本人が残した書簡、彼についての史料が多い¹³。

13、ゴンザロ・レベロー **Gonzalo Rebello**

「長い間日本で働いたポルトガル出身、二人の年輩神父、バルタサル・ロペスとゴンザロ・レベローでした。」(フィリピン管区長ロペス宛てパシオ神父書簡、長崎より1609年2月24日付 Cortes 565 95-96v¹⁴)

14、ペトロ・ラモン **Pedro Ramon**

1550年パステイダ、サラゴサ、スペインに生まれる。1570年アルカラでイエズス会に入会。1572年ローマへ行く。1573年コインブラ、ポルトガルにて司祭となる。1574年インドへ出発。ゴアで修練長になる。1576年マカオへ行く。1577年長崎到着。1580年臼杵で修練長になる。1581年長崎の会議に与かる。1582年少年使節出発。1586年臼杵から山口へ。1587年生月に行く。ローマに手紙を送る。¹⁵1592年八良尾のセミナリヨの院長になる。1595年マカオに行く。1600年日本に帰る。宇土城で加藤清正によって捕えられる。1601年博多の教会に行く。1610年長崎に向かう。1611年長崎にて死亡¹⁶。

15、ジャンフランチェスコ・ステファノニ **Gianfrancesco Stephanoni**

1567-1573年間ゴアを中心にインドで宣教。1574年に日本上陸、五島列島へ。1575-77年間、大村、三箇、河内で宣教。1578-1582年間ミヤコ地区長を務める。1578年報を書いた。1583年高槻セミナリオ、1584年大友宗麟の葬儀(津久見)に参加。1587年平戸へ追放。1589天草、1592有馬1599-1612。長崎コレジオ¹⁷。

¹³ 史料、(尾原『キリシタン文庫』p. 374より) Jap. Sin. 6, 257-258v, 267-273v, 274-278v, 279-280v, 284-286v, 287-288v, 8 I, 122v-123v, 177-178v, 179-180v, 8 II, 108-109v, 8 III, 153-153v, 10 I, 90-92v, 11 I, 60-64v, 66-72v; 11 II, 185-187v, 317-318v, 319-319va 324-324v; 12 I, 184-186v; 12 II 244-249v, 252-258v, 332-334v, 362-363v; 13 I, 126-127v; 13 II, 199-200v; 14 II 219-222v, 223-225v, 278v-279v; 22 185v; 45 II, 6-6v, 8v-9, 13v-14 120v-123. BRA, Cortes 562, 175-176v; 566, 273-276v 567, N. 6 BM, Add. Mss. 9860, 103-105v. 彼についての記事、Bianchi, G. O. *Gnecchi-Soldi* (Brescia, 1914). Carminati, S., *P. Organtino Gnecchi Soldi* (Casto, 1984). Cieslik, H., *Father Organtino*, The Missionary Bulletin 9 (1955) 186-193, 253-259.

¹⁴ 史料(尾原『キリシタン文庫』p. 398より) Jap. Sin. 11 I, 60-64v, 12 II 359-360v, 45 II, 7.

¹⁵ 彼は天正遣欧使節に対する批判などを伝えるが、これについて、結城了悟は「ペドロ・ラモンと対話して」(『キリシタンになった大名』聖母の騎士社:聖母文庫 1999年2月)で正確な分析を残した。

¹⁶ 本人による史料(尾原『キリシタン文庫』p. 396より) Jap. Sin. 8 III, 153a, 10 I, 76-78v, 10 II, 282-285v, 11 II, 322-323v, 12 II 345-346v, 13 I, 20-21v 22-23v, 14 II, 219-222v, 223-225v, BRA, Cortes 566, 281-282v, BM, Add. Mss. 9860, 103-105v.

¹⁷ 史料(尾原『キリシタン文庫』p. 382より) Jap. Sin. 7 I, 241-243v, 8 I, 120-120v, 8 II, 109v-110, 9 I, 15-18v, 10 I, 82-85v, 10 II, 187-188v, 11 I, 44-45v, 45 II, 9-9v, 10v-13v, BRA, Cortes 562, 177-177v, 237-240, 566, 440-442v.

16、伊東マンシヨ Ito Mancio

日向の領主伊東家の分家の出身。1580年臼杵で受洗し、有馬のセミナリヨに入り、ラテン語、音楽、日本文学を学ぶ。82年2月(天正10年1月)に、大友宗麟の名代として天正使節の正使に選ばれ、長崎を出発し、84年8月ポルトガルに到着。同年11月フェリペⅡ世に謁見し、ローマでは85年3月教皇グレゴリウス13世、同年4月シクストゥス5世に謁見。イタリア、スペイン、ポルトガルの諸都市を訪問。90年7月インド副王使節として来日し、ヴァリニャーノに同行して帰国した。91年聚楽第で秀吉に謁見し、洋楽器を披露した。同年天草河内浦の修練院に入り、マカオで3年間神学を学んだ。1608年司祭に叙階され、小倉を中心に布教した。長崎で死亡。

伊東マンシヨの書いた22通の手紙が現存する。その時期は1585年の6月13日から1592年12月1日までであり、外交関係に限ると断言できる。発行地はイタリア、スペイン、ポルトガル、ゴア、マカオ、天草となっている。ローマ教皇宛は2通、イエズス会総長宛は6通、会員イルマンや神父宛は3通、それぞれの大統領、公(市長)宛は11通である。言語はイタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ラテン語、日本語である。これを合わせて考えればマンシヨの外交能力に驚かされる。その修正などを他人に依頼したとしても、例を見ない活躍であり、日本外交の歴史に欠かせない存在であると言えよう¹⁸。

17、マンシヨ平林妙口 Mancio Myokuchi Hirabayashi

平林は1598年より1606年までマカオのサンパウロ学院で哲学と神学を勉強した。しばらくの間宣教活動してから京都に送られ、1614年に神父になった。セルケイラ司教が最後に叙階した神父の一人である。追放令後日本に残り、二年間熱心な宣教活動をしたが疲れすぎて死去。カルディムによれば「無流血の殉教者」と評価した。(ローマイエズス会文書館、Jap.Sin. 58, 151v)

18.秋月のダミアン (Damião da Cruz)

日本人。1538頃筑前に生まれ、1556年頃から同宿として布教に従事し、1568年にイエズス会に入り、その後自分の意志で退会したが、1576年に再び入会を許され、最後まで留まった。1586年12月29日に下関で死去し、1592年にヴァリニャーノが彼の遺体をイエズス会本部に移動させた。現存するダミアンの書簡については、デ・ルカ・レンゾ「秋月のダミアン書簡に現れるイルマンの人物像」(『長崎談叢』第九三号、2004年)。彼の死について、フロイス『日本史』10 中央公論社 p.128-132。『秋月のクリシタン』p.58~85、「秋月出身の修道士ダミアン」に詳細な研究が出ている。

本部墓地とその動き

迫害によって人・施設・遺骨まで本部に集中するようになった。本来は本部修道院の会員のみが葬られる墓地に、殉教者などの遺骨も集められた。その一例として、有馬の殉教者についての史料を挙げよう。

〔クリシタンたちは〕マグダレナ林田と仲間、殉教した有馬出身7人の遺骨をとってカルヴァリオ管区長に渡した。〔その後〕セルケイラ司教が主式した荘厳な行列をもって、我が会員たちが葬られている〔本部の〕墓地、十字架の麓に葬った。この偉大な宝によってこの家(修道院)が豊になり、これらの贈物を通して神様からの大きな恵みが期待できる¹⁹。

¹⁸ 詳細は、結城了悟「伊東マンシヨの書簡」(『長崎談叢』長崎 1982 65輯 21-45)を見て頂きたい。

¹⁹ セバスチャン・ヴィエイラによる長崎発イエズス会1613年の年報1614年3月16日 Jap. Sin. 57, 269-271v より拙訳。

有馬の宣教師が1612年に追放されたとき、殉教者たちの遺骨を運んで、本部は巡礼所になったことが明らかである。換言すれば、宣教師や日本キリシタンにとって本部が「最後の砦」となった。

しかし、徳川幕府の政策によって、本部に遺骨を置くことも許されず、一旦「町の外」に移動させる命令が下った。当時の様子を伝える貴重な史料がある。

〔長谷川〕権六は生きている人を迫害した後、死者をも迫害し始めた。この町〔長崎〕の3墓地、すなわち、ミセリコルディア、聖十字架とサンタ・マリアにあった遺体を掘りおこして長崎市外にあるサン・ミゲル墓地に移すように命じた。何日もの間、町のいたるところで泣き声と涙が続いた。キリシタン達は当地の習慣に従って置かれていた墓碑や十字架を自らの手で外した。その中にはイエズス会員と共にミセリコルディアに葬られていた司教ドン・ルイス〔セルケイラ〕がおり、移された²⁰。

これによれば、少なくともリストに挙げた会員とセルケイラ司教の遺骨は一旦、炉粕町にあったサン・ミゲル墓地に移され、1614年以後マカオに送られたことになる。なお、遺骨の全部か分骨してか、また元にあったサン・ミゲル墓地との遺骨を区別できたか、不明な点が残る。将来、江戸町にある旧長崎県庁敷地の発掘調査が行われることになれば、墓地の移動について何点か明らかになるとの期待がもてる。

印刷機とその関連の施設

上述の通り、本部はコレジオでも印刷場でもなかったが、迫害の結果として全国のキリシタンとそれに関連する施設が集中することになった。それで、1614年直前、本部は多目的な場所になった。影響からして、印刷機の動きについて簡単に紹介したい。これについても多くの専門家の研究がある²¹ので、簡潔に述べた二箇所を引用しておく。

天草のコレジオ閉鎖が命じられ、コレジオ関係者と施設は長崎のトードス・オス・サントスに移り、さらに一五九八年暮から翌年の春にかけて岬の教会に移った。それまで印刷所は「コレジオの独立した一部にラテン語並びに日本語印刷の設備あり」とコレジオ内に併置されていたが、長崎移転後間もなく「立派な印刷専用の施設が完成し、ここでラテン語及び国字本を印刷する」ことを一五九九年二月のメスキータ師の書簡は伝えている。この印刷専用の施設は、一五九八年に建設が開始され、同年末から翌年の初頭には完成した。同時に国字の編成替も行われて二千余りの草書体の漢字と平仮名の小型活字が用意され、キリシタン版印刷にとって新たな段階を迎えることになったのである²²。

丁度長崎の教会の諸活動が布教事業を着々と功を奏した頃、コレジオは岬の新しい教会の建築を始めた。1598年の暮れか1599年の春に岬の教会へ移転した。旧長崎県庁の場所である。コレジオには司祭や修道士が50名位いてコレジオの側には家が建てられ、セミナリヨの生徒80名余りが居住していた。また同宿といって諸仕事や文書の作成、画学舎や付属印刷所の従事者がいて、同宿の身分で印刷や活字の彫刻等の仕事を学んでいた者が40名位いた。この頃に印刷所が新築された²³。

²⁰ 1620年3月20日付コーロス書簡 Jap. Sin. 35, 138より拙訳。文末に史料写真を掲載。

²¹ この分野の定番と言える、Satow Ernest M. Satow; The Jesuit Mission Press in Japan, 1591-1610, London, 1888 (Tokyo 1926)。キリシタン印刷を日本の印刷全体でとらえた研究として、鈴木広光『日本語活字印刷史』名古屋大学出版会 2015年2月が参考になる。

²² 青山 英夫「キリシタン版『太平記抜書』に関する覚書」上智大学紀要1992年11月p. 32-33

²³ 加津佐に創設した活版印刷所 国際印刷大学校研究報告第2巻

世界の言語学で高い評価の『日葡辞書』、『日本文典』なども本部で印刷され、フロイスの『日本史』、の大部分、『年報』も本部で書き上げられたことを考えれば、文字を通してどれほどの役割が果たされたかが明らかである。印刷のみならず、日本語そのものにも大きな影響を与えたと見てもよからう²⁴。

最後に

ここで簡単に紹介したイエズス会の本部とそこに埋葬された会員は日本と世界の歴史に大きな影響を与えたと断言できよう。天正遣欧使節（1585）だった伊東マンショ、原マルチノ、2008年に列福された中浦ジュリアンの3人（千々石ミゲルは退会した）は、1608年に本部の教会でセルケイラ司教によって司祭叙階を受け、世界的に有名になった。1614年1月1日に後殉教を遂げたベント・フェルナンデス神父が最終誓願をたてたりした。全国の教会を司るセルケイラ司教も本部を中心に活躍した。後の迫害による変動により当地のキリシタンが姿を消したとはいえ、その影響が消えたわけではない。出身地や養成をみれば、国際的な文化をもった人達が現地から日本の限界と良さを世界に知らせた。しかし、自分の国籍より、彼らがイエズス会に属したからこそ、世界との繋がりや相互の支えあいがあったことを否定できない。日本キリシタンの一部に過ぎなかった彼らは、与えられた条件を最大に活かした模範だったと見ても差し支えなさそうである。彼らが思い描いた日本、また世界がいつか実現できるように祈りたいものです。

主な参考文献

- Alvarez Taladriz 編註「日本イエズス会第二回総協議会議事録と裁決(1590年)」、『キリシタン研究』16輯、吉川弘文館、昭和51年7月)
- H・チースリク著「セミナリヨの教師たち」、ならびに 柳谷武夫著「セミナリオの生徒たち」、『キリシタン研究』第11輯、吉川弘文館、昭和51年10月（第二版）
- Ir. Iñacia Kataoka, Rumiko “A vida e a Ação Pastoral de D. Luís Cerqueira, S.J., Bispo do Japão (1598-1614)”, Macau, 1997
- Jap. Sin. 22, 51-58 Jap. Sin. 10 II, 339-339v Jap. Sin. 35, 138
- 浅見雅一『キリシタン時代の偶像礼拝』、東京大学出版会、2009年3月、特に、第三章、主従関係と殺人の倫理、ヴァリニャーノとゴメスの偶像礼拝論、pp.139-203
- アレシャンドウロ・ヴァリニャーノ著『日本巡察記』、（東洋文庫 229）松田毅一、佐久間正、近松洋男訳、平凡社、1995年7月
- 井手勝美訳「日本イエズス会第一回協議会(一五八〇～八一年)と東インド巡察師ヴァノの裁決(一五八二年)」、『キリシタン研究』第22輯、吉川弘文館、1983
- 海老沢有道 他編著『キリシタン教理書』、教文館、1993年11月
- 尾原悟編『きりしたんの殉教と潜伏』、教文館、2006年12月
- 尾原悟編『キリシタン文庫』南窓社 1981
- 片岡千鶴子著『八良尾のセミナリヨ』、キリシタン文化 研究シリーズ3、（昭和45年6月再販）
- 川村 信三『キリシタン信徒組織の誕生と変容—「コンフラリヤ」から「こんふらりや」へ—』、教文館、2003年6月
- 川村信三 翻訳、ガブリエル・バスケス著「日本の倫理上の諸問題について」(Difficiliores casus, quorum resolutio in japonia desideratur)、中世思想原典集成20 近世スコラ学（平凡社）2000年8月 pp.965-995
- 川村信三『戦国宗教社会=思想史』、知泉書館、2011年6月

²⁴ 最近の研究として、郭南燕編『キリシタンが拓いた日本語文学』 明石書店 2017年9月

- キリシタン文化研究会編『キリシタン研究』第10輯、吉川弘文館、昭和40年3月
- 五野井隆史『日本キリシタン史の研究』、吉川弘文館、平成14年11月
- デ・ルカ・レンゾ「秋月のダミアン書簡に現れるイルマンの人物像」(『長崎談叢』第九三号、2004年)
- デ・ルカ・レンゾ「識別に生きたキリシタン大名、高山右近」—和田・荒木家との葛藤—(『キリシタン文化研究会会報』135号、2010年5月)
- 林田明著『スピリツアル修行の研究』影印・翻字篇、風間書店、昭和50年3月
- ペトロ・ゴメス『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』III、尾原悟編著、教文官、1999年11月
- ヴァリニャーノ、松田毅一訳、『日本巡察記』、桃源社、昭和40年3月
- ロペス・ガイ著 井手勝美訳『十六世紀キリシタン史上の洗礼志願期』、1973年3月片岡弥吉、『日本キリシタン殉教史』、時事通信社、1979年
- 牧英正『人身売買』、岩波新書(青版)801、1971年10月
- 結城了悟、イルマン・ロレンソの死』、『長崎談叢』55号、長崎、1~12頁
- 結城了悟「伊東マンショの書簡」、『長崎談叢』65号、長崎、1982年、21~45頁
- 結城了悟「天正少年使節についてペトロ・ラモンの手紙」、『長崎市立博物館館報』18号、長崎、1977年、1~20頁
- 結城了悟「有馬のセミナリヨ 1595年—1614年」、『キリシタン研究』第21輯、吉川弘文館、1981年10月
- 結城了悟『イルマン』、日本二十六聖人記念館、長崎、2001年
- 結城了悟『ロレンソ了齋』平戸の琵琶法師、長崎文献社、2005年4月